

(世界史プリント8-4)

第14章アジアの「近代化」 1. オスマン帝国支配の動揺とアラブの覚醒

e. トルコ革命

- ①トルコ…第一次大戦で敗北→[1]条約を締結
 - 1)多くの領土を失う
 - ・イギリス…[2]・[3]・[4]獲得
 - ・フランス…[5]・レバノン獲得
 - 2)国家財政監督権を連合国に奪われる=半植民地化される
- ②[6],トルコ大国民会議を組織して蜂起→[7]に臨時政府樹立
→イズミルに侵入した[8]軍を撃退
- ③1923年、[9]条約を破棄=[10]条約締結→独立を確保
- ④[11]制(1922)、カリフ制(1924)廃止→トルコ共和国樹立、大統領に
政教分離・アラビア語の廃止=ローマ字の公用化、婦人参政権など近代化改革実施

2. イランの「近代」

- ①1796 [12]朝成立(トルコ系)
- ②1828 [13]との間でトルコマンチャーイ条約を締結
=[6]地方割譲、治外法権承認など不平等条約
- ③1848 [14]の反乱
- ④アフガニスタンをめぐる争いで[15]の介入をまねく
- ⑤イギリスに対する[16]運動→1905[17]へ
- ⑥第一次大戦で中立を宣言→[18]・[19]軍の侵入を受ける
 - ↓
- ⑦1925 [20],クーデタを起こし実権を握る ([21]朝樹立)
国名を[22]と改称、トルコに習って近代化改革を進める
 - ↓
- ⑧第2次大戦において中立国となるが、イギリス・ソ連の進駐を受ける
→民族運動の高まり→1951[23]によるアングロ=イラニアン石油の国有化
 - ↓
- ⑨英米と結ぶパハレヴィー2世のクーデターにより親英仏政権の樹立=「白色革命」の実施
 - ↓
- ⑩1978 国王独裁に反対する運動の高まり
→1979[24]師を指導者とする[25]共和国成立
([26]革命)
[27]主義を説き、アメリカと強く対立

第14章アジアの「近代化」 4. イギリスのインド支配と民族運動

a. イギリスのインド支配

- ①1498 [28],カリカットへ到着→ヨーロッパ人の活動開始
- ②17c オランダ、イギリス、フランスなどの進出本格化=[29]設立
→インドの地域政権など諸勢力を巻き込んで抗争をつづける
- ③1757年[30]の戦いでイギリスがフランスを破り優位を獲得
→以後、イギリスは各地で支配地域を広げる=植民地化の進展
- ④イギリスのインド支配
 - 18世紀 インドからの[31]の輸入、その拡大のための領土拡大
 - 18c末~19c初 大地主に土地所有権を認め、そこから徴税を行う(ザミナール制)
 - 産業革命の進展・イギリスから[32]を輸入、[33]を輸出
→[34]の壊滅的打撃
 - イギリス人経営による藍、[35]、アヘンなどの[36]経営の拡大
 - ↓
 - こうした目的達成のための鉄道網、通信網の整備、またその費用獲得のための徴税制度確立
「インド人の金で施設整備や軍事費などの統治費用をまかない利益を本国に持ち帰る」
→「富は一方向的にイギリスに流出し、インドは貧困化の道を歩む」
- b. インド大反乱
 - ①19世紀前半までに[37]はインド全域を支配下におく
 - ②1857年 [38]の反乱(「1857年インド独立戦争」)発生
→ただちに全国化、広汎な人々の参加、[39]的性格が強く統一性を欠く
 - ↓
 - これをきっかけにイギリスは[40]を減ぼす
[41]を解散し、インドを直接支配する
→1877、イギリス(女)王を皇帝とする[42]をたてる
 - ③19世紀の後半、大飢饉の頻発、農民の反乱などつづく(p295~296)
(餓死者は1850~1900で2000万人に達する)
教育制度の充実→[43]階級の増加、[44]階級の成長
 - ↓
 - 1885年親英派の知識人([45]教徒が多い)などを集め、[46]を結成
→[47]らの指導によりしだいに急進化、民族主義的傾向を強める
→[48]を唱える